『比較民俗研究』28. 2013／11

研究ノート

現代を生きるアイヌ民族とその文化伝承
－北海道における調査事例を中心に－

黄英蘭※

中国において、日本国内の民族構成を考える場合、「日本は単一民族である」という認識が強かった。しかし、2008年、日本国会において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されて以来、中国人学者の間ではアイヌ民族に対する関心が高まっている。日本語と日本文化を勉強してきた私は、先住民族であるアイヌ民族の文化を日本国内文化の一つとして位置づけ、博士課程において、現代のアイヌ民族がその固有の文化を如何に伝承し、伝統文化はどのような形で現代のアイヌ民族に定着しているかについて検討することにした。

ここでは、2012年9月から2013年1月まで北海道で行った調査に基づき、まりも祭りと先祖供養の儀式を例に、現代のアイヌ民族の文化伝承の状況について触れてみようと思う。

1．伝統文化の新しい創出――まりも祭り

まりもという生物はユーラシア大陸、アイスランド、北アメリカ大陸の五大湖周辺を含め、地球の北半球を一周するように帯状に分布する緑藻類の一種である。日本では主に阿寒湖に生息するが、阿寒湖のまりもは球状を形成するのが特徴で、1921年に日本国の「天然記念物」に指定され、1952年にはさらに「特別天然記念物」に指定される。

だが、盗採、木材流送、水力発電による阿寒湖水面の低下により1940年代にまりもは死滅の危機に面していた。その保護対策として行政側及び阿寒湖畔住民側では「まりも保護対策協議会」、「阿寒湖のまりも愛護会」などを設立し、全国にまりも返還運動を呼びかけるようになった。そして返還されるまりもを湖に返す際、ただ返すのではなく阿寒湖畔に先住していたアイヌ民族の伝統的な儀式に則った祭りをし、まりも保護思想の普及を図ろうしたのがまりも祭りの始まりである。

まりも祭りは1950年に阿寒湖畔において第一回を迎えてから毎年開催されるが、1974年の第25回まりも祭りからは、祝日である体育の日を最終日とし、8日から10日にかけて行われている。

ここでは、2012年第63回まりも祭りを中心に記載する。まりも祭りはアイヌ民族以外の阿寒湖畔住民によって行われるまりも踊り行進及びまりも神輿などといった行事とアイヌ民族がメインになって行われるまりもを迎える儀式、まりもを護る儀式、まりもを送る儀式などに分かれる。ここではまりも祭りの核心をなす後者を中心に紹介する。

※中国・中央民族大学民族学・社会学学院民族学学科博士課程

（1）まりもを迎える儀式

10月9日の夜7時30分からまりもを迎える儀式が行われる。暗い湖面から丸木舟がゆっくりと湖岸に向かって近づく。丸木舟には船をこぐ人、タイマツを持つ人と真ん中でまりもを持つ人が乗っている。まりもはこのまつりのため許可を得て、一時的に借りてきたものである。湖岸の一番前のほうには祭司を中心に数人の男の人が立っており、その後ろには北海道各地から集まってきた150人前後の北海道アイヌ協会各支部のメンバーたちである。男女老若を問わず、民族衣装を着ており、男の人はサパンペ、女の人はマタンプシをかぶっている。 そして、女性たちはみんなでアイヌ語で「まりもの歌」を歌う。丸木舟が湖岸に着くとまりもは祭司に手渡される。祭司はまりもを事前に設置しているヌササン（祭壇）の上に置き、カムイノミ（神様への祈り）を行う。そして、まりもを両手で胸の前に持ち、アイヌコタン への行進が始まる。祭司の後ろはタイマツを手に持ったアイヌ民族行列が2列に並んで「まりもの歌」を歌いながら行進する。観光客たちはそれを見ながらビデオと写真を撮る。

（2）まりもを護る儀式

タイマツ行進は観光客とともに両側にホテルと土産屋の並ぶ阿寒湖畔の中央通りを進み、約30分間でアイヌコタンに到着する。まりもはアイヌ民族の伝統家屋である「チセ」の前に作られたヌササンに置かれる。そして、チセの中ではまりもを護るカムイノミが行われる。コタン広場では北海道アイヌ協会各支部のメンバーたちによるアイヌ舞踊の競演が始まる。みんな自分たちの地域に伝わる舞踊を披露するが、大人だけではなく、子供たちも一緒に踊るのである。観光客たちは広場の両側に立ち、踊りを見る。司会者は踊りや歌の意味を観光客に説明する。踊りの競演が終わったら、まりもはチセの中に護られ、ここで一夜過ごすことになる。

（3）まりもを送る儀式

10日の朝10時からまりもを送る儀式が行われる。まず、チセの中でカムイ

ノミが行われる。カムイノミが終わるとアイヌ民族行列がアイヌコタンを出発する。中央通りのホテルの前では社長をはじめ従業員一同が拍手で行列を迎える。

行列がまず着くところは前田正名翁胸像の前である。 財団法人前田一歩園の現任理事長が行列を迎える。祭司はまりもを胸像の前に置き、イクパスイ（捧酒箸）でトノト（お酒）を捧げる。そして、祭司ともう二人の計3名で胸像に向かってオンカミ（礼拝）を行う。オンカミが終わったら一人の男によって弓の舞が踊られるが、周りの男たちは元気よく掛け声をかける。

前田正名翁胸像を後にした一行は再び中央通りを進み、5分後には阿寒岳神社に到着する。神官が出迎え、まりもを祭司から受け取ると、それを神社の拝殿の中に入れ、祝詞をとなえ、紙の紙幣がついた榊を前に立つ男の人々に渡し、渡された人はそれを神前に置き、オンカミをする。そして、神官が大きな盃を持ってきて祭司に渡し、お酒を注ぐ。祭司がまず少し飲み、これを隣の人へと回す。神社での拝礼が終了すると、

祭司は再びまりもを持ち、行進が続けられる。

行列は10分後に湖岸に到着するが、まず湖岸に作られたヌササンでカムイノミが行われる。カムイノミが終わると、ヌササンの前の広場で踊りの競演が行われる。踊りの競演が終了するとアイヌ民族の人々と観光客は広場から10メートル離れた淺橋のまわりへ移動し、祭司をはじめアイヌ民族の長老たちが前に並ぶ。後ろでは女性たちが「まりもの歌」を歌う。丸木舟にまりもを持った祭司が乗り、さらにその前後に一人ずつ船のこぎ手が乗る。祭司は湖の中にまりもを一つずつ入れる。アイヌ民族も観光客も厳粛な雰囲気のなかでそれを眺める。まりもを全部湖の中に入れると、丸木舟は湖岸に戻る。これでまりもを送る儀式が終了する。

以上述べたように、まりも祭りは阿寒湖に生息するまりもという生物とアイヌ民族の伝統的な送り儀礼が統合されて誕生したものである。まりもを迎え、護り、送るという行事はアイヌ民族の伝統社会で行われたイオマンテ（熊送り）の熊を捕る、飼育する、送るという三つのプロセスの新しい創出である。イオマンテはアイヌ民族がキムンカムイと呼ばれた神様の熊に対する感謝の気持ちを表す儀礼であるのに対し、まりも祭りは人間と動物及び自然界のすべてを育んでくれる「天然に対する感謝祭り」であり、観光客に「見せるための文化」でもある。そして、まりも祭りは阿寒湖畔に居住する和人とアイヌ民族の盛大な行事であり、両者の協力によって60年という歳月をたどってきている。この意味で言えば、この行事は単なる祭りではなく、アイヌ民族とその周辺の和人との民族的共生を促進する重要な役割を果たしていると言えよう。

2．伝統文化の固守——先祖供養の儀式

アイヌ民族の伝統社会では、死んだ人の霊はあの世へ行くと考える。あの世というのはこの世と天空を隔てたところにあり、この世と同じように山、川と海があり、神々も人々もそこで暮らしているという。あの世に行った先祖が不自由なく暮らせるように、そして自分たちを守護してくれる先祖神に感謝するために、アイヌ民族の人々は供物を用意してあの世へ送る。それが「イチャルパ」または「シンヌラッパ」と呼ばれる先祖供養の儀式である。

伝統社会では年に二回盛大な先祖供養の儀式が行われた。アイヌ民族の人たちの考え方では、一年間は二シーズンである。二シーズンとは夏の年と冬の年であり、夏の年というのは、夏を中心にして春先から秋口まで、冬の年は、秋末から春先までである。昔はその境目で大祭が行われたが、先祖供養の儀式も欠かせないものとして行われた。そのほかに不定期的に行われることもあるが、亡くなった母親の夢を見たとか、自分を世話してくれた伯父さんや伯母さんの夢を見たという場合がそうである。夢を見たということは、供養してほしいから先祖が夢を見せたのだというので、あまり日をおかないうちにいろいろ供物を作って、先祖供養をするのである。

昔は、各家がそれぞれ自分の家の送り場で供物をあげて行っていたが、現在はあらゆるアイヌ民族の祭りの時と、アイヌ民族

の遺骨が収納されている所か遺跡が発見された場所などで共同で定期的に行う民族行事となっている。ここでは、北海道大学構内の遺跡保存庭園 で行われた北海道アイヌ協会のある支部が行った先祖供養の儀式を記載する。

（1）儀式の準備

アイヌ民族の伝統社会では男性と女性の役割がはっきりと分かれている。日常生活においては、男性は狩猟と木彫り、女性は山菜採り、畑作り、調理と縫い物とう分担がある。儀式の際は、男性はヌササン作り、イナウ（逆さ削りの木幣）削り、カムイノミを担当し、女性はご馳走の用意をするほか、神様にウポポ（女性たちが輪になって座り、輪唱する形で歌う伝統の歌）と踊りを奉納する。

ここで記載する先祖供養の儀式でも、男女は各自の仕事を分担していた。準備段階においては、男の人は囲炉裏とヌササン作り、イナウ削りに携わる。ヌササンは太陽の神、山の神、水の神、大地の神などを祀るヌササンと、先祖を祀るヌササンと、二つ作る。イナウは柳の木を削って作るのだが、柳の木は許可を得て事前に切ってきたものである。こういう仕事は祭司と年配の男性たちを中心に行われるが、若い男の人たちも参与する。

供物を用意するのは女性の仕事である。ただ、アイヌ民族の考え方では、月経は不浄なものなので、若い女性は先祖神に捧げるご馳走に触るのは禁止される。だから、ご馳走の用意をするのは年配の女性たちに限る。若い女性たちは後ろに立ち、年配の女性たちの仕事をする様子を見る。供物の種類はとても豊富だが、そのなかでトノトは一番重要なものである。あの世の神々は宴会が好きで、トノトは欠かせないものだが、あの世にはトノトがないので一番喜ばれるものだという。トノトは4、5日前から年配の女性が心をこめて作るのである。トノトのほかに、いなきびご飯、コンブシト（昆布たれの団子）、南瓜御粥、サケ、お菓子、りんご、バナナ、葡萄、梨、みかんといろんな穀物などの供物が用意される。

（2）儀式の進行

用意された供物は、囲炉裏の上座のところ（囲炉裏と太陽の神様などを祀るヌササンの間の空間）に運ばれる。そして、祭司と男性たちが囲炉裏の両側に座り、女性たちはその後ろのほうに座る。

儀式の進行段階においても、男女の役割分担ははっきりしている。男性は火の神様及び太陽の神様、山の神様などにカムイノミを、女性は先祖神にご馳走を奉納する。

儀式はトノトの出来具合を見る男の人の「シノ　ピリカ　トノト（大変すばらしいお酒です）」という報告と男性たちのオンカミから始まる。トノトを注ぐ役目の二人の若い男により祭司及び長老たちにトノトが注がれる。各人はイクパスイを用いて、火の神様と囲炉裏に立てられたイナウにトノトを捧げる。火の神様はアイヌ語で「アペフチカムイ」と呼ばれるが、年配の女性だという。火の神様はアイヌ民族にとって一番身近な存在で、人間の言葉をほかのいろんな神様に伝えてくれる重要な役割を果たす。祭司は火の神様にトノトと色々な穀物及び

タバコなどを捧げながら、カムイノミをする。カムイノミの後、トゥキ（盃）の中のトノトを飲む。隣の男たちも一口ずつ飲んだあと、トゥキは後ろに座っている女性たちに回される。女性たちも礼拝し、トノトを飲む。そして、祭司を除く全員の男性はトゥキとイクパスイを持って立ち上がり、太陽の神様、山の神様、水の神様、大地の神様が祀るヌササンのほうへ行き、そこのイナウにトノトを捧じる。

男性たちが全員席に戻ったら、後ろに座っていた一番年配の女性が囲炉裏のほうに席を移り、祈り言葉を述べながら火の神様に捧酒する。そして、鍋のなかに火をもらい、それを先祖神を祀るヌササンのところへ持っていく。囲炉裏の上座に置かれていた供物も全部移動される。これから女性たちによる先祖への祈りが始まるのである。祈りは年配の女性から若い女性へという順番で行われるが、各人はヌササンの前に座り、イナウを立て、そこにトノトを捧げる。そして、サケ、りんご、コンブシト、お菓子などのご馳走を手にとっては、地面に置く。口の中では、亡くなった先祖の名前を一人ずつ呼びながら、「今日はご馳走をたくさん用意しているので、みんなで楽しくパーティーをしてね。」と言う。祈りが終わったら自分たちも供物を少しもらう。先祖たちと一緒に同じご馳走を分かち合うためだという。

女性たちの先祖への祈りが終わったら全員立ち上がり、民族舞踊を踊る。儀式の際、踊りは欠かせない神様への奉納である。

（3）儀式の終り

踊りが終わると、全員席に戻り、祭司は儀式が無事に終わるように守護してくれた火の神様に感謝の言葉を捧げる。そして、囲炉裏に立てられたイナウを燃やすのだが、燃える様が盛んだと火の神様は当日の奉納にとても満足しているのだという。その後、若い男性たちはトゥキ、イクパスイ及び囲炉裏の上座のところのゴザなどを丁寧に片付ける。片づけが終わった後全員席を立ち、儀式は終了するのである。

この先祖供養の儀式はとても厳粛な雰囲気の中で行われる。そして、先祖供養の儀式の際に、太陽の神様、山の神様などをも祀るのは、アイヌ民族は自然神が守ってくれてこそ人間及び人間神がいると思うので、先祖を供養する際、まず自然神への感謝の儀礼は欠かせないものだと祭司は言う。

伝統社会において家族を単位に行われた先祖供養の儀式が現在は民族共同の行事となっているというような変化はあるものの、儀式においての男女の役割分担、儀式の流れ、禁忌の遵守などから、伝統そのものをきちんと守ろうとする意図が見られる。まりも祭が伝統的な送り儀礼をもとに、見せる文化として創造されたものであるのに対し、この先祖供養の儀式は伝統そのものを厳粛に受け継ごうとしたものである。現代を生きるアイヌ民族がさまざまな形で伝統文化を伝承していることが分かる。

3. アイヌとして生きる人々

今回の調査において、アイヌ民族としての意識が強く、文化伝承や文化普及活動に精力的に携わっている人々に出会った。ここでは、札幌に居住している太田ゆう子さんとその娘さんを例にアイヌとして生きる

人たちの心情を示すことにする。

今年65歳の太田ゆう子さんは北海道のあるアイヌ民族部落に生まれる。3歳の頃までチセに住んでおり、彼女が生まれた部落は80%がアイヌ民族だったので、小学校まではほとんどアイヌ民族だけの環境で育ったと言う。民族の歌や踊り、刺繍などの文化が自然に身につき、10代の頃には、昭和新山、登別などでアイヌコタンの観光の仕事に携わる。しかし、アイヌ民族に対する周りの偏見と差別、生活レベルの格差を感じ始め、アイヌの活動から遠ざかり、本州で20年間飲食店を経営する。「その時は自分がアイヌであることが嫌でね、北海道から逃げ出し、ただ日本人として生きていたんだね。20年間アイヌをやめていた。」と言う。

40代の頃、太田ゆう子さんは家族と一緒に北海道に戻るが、あるきっかけで再びアイヌの活動を始める。それが今まで続き、20年以上アイヌ文化伝承と普及活動に携わる。地域範囲は北海道を中心に全国各地に及ぶ。歌と踊りの披露、民芸·工芸品展覧会、刺繍教室、講演などの活動でハードなスケジュールをこなしている。「アイヌはこの社会でまだまだ大変なの。学校で差別を受けているアイヌの子供は多いし、それを恐れ、アイヌであることを子供に教えない親もたくさんいる。もっと多くの一般の人たち（筆者注：アイヌ以外の日本人を指す）にアイヌのことを正しく理解してもらわないとね。」と言う。

ゆう子さんの娘さんのピリカフミさんは今年19歳になるが、彼女と会うたびに彼女のアイヌ文化知識量の豊富さと強い民族的誇りに感心する。負けず嫌いの彼女は、ムックリ（アイヌ民族の伝統楽器）全国大会の優勝者であり、お母さんと一緒にアイヌ文化普及活動に励んでいる。現在大学生である彼女は卒業してからもアイヌ文化のアドバイザーとして活動をしたいと言う。「アイヌに対して中途半端に知っている人のために働きたい。」と彼女は真剣に言っている。「中途半端」というのは「アイヌは未開人」だとか「汚い」とかというアイヌ民族に対しての日本社会の古い先入観と偏見だと思う。

アイヌ民族の血を引く人の中には、周りに「私はアイヌだ」と宣言し、文化伝承及び文化普及活動に積極的に携わっている人もいれば、アイヌであることを隠し、ただ日本国民として生きようとする人もいる。自分がアイヌであることを認めた生き方をするかどうかは個人個人の「選択」である。しかし、この違う「選択」の背景には同じ社会的要因が作用していることに気づかなければならない。それは「少数者にあまり寛容ではない」国民の心理がまだまだ存在していることである。「選択」というのはこの社会的現実をどのように捉えるかの問題である。つまり、それに積極的に立ち向かうかそれとも回避するかとの違いである。「多文化共生」の実現のためには主流文化の担い手の人々の少数者に対する理解と寛容な心がどんなに肝心なのかを改めて感じるのである。

参考文献：

煎本孝（2001）「まりも祭りの創造―アイヌの帰属性と民族的共生―」『民族学研究』66/3

藤村久和（1985）『アイヌ、神々と生きる人々』福武書店

註

サパンペとマタンプシはアイヌ民族の伝統社会においてそれぞれ男の人と女の人が、儀式の際に被っていたものであるが、現在は儀式だけではなく、普段でも民族衣装を着る時は必ず一緒に被るようになっている。

アイヌ語で「コタン」とは「村」の意味である。阿寒湖畔のアイヌコタンは旧来からのものではなく、1959年に阿寒湖一帯の自然保護活動を行ってきた前田一歩園財団の当時の理事長である前田光子の呼びかけによって、前田が無償提供した土地に阿寒湖周辺のアイヌ人が移住し、コタンが形成されたものである。現在36世帯、約130人のアイヌ民族が居住している。ここではアイヌ民芸品のほか、伝統舞踊、伝統文学を舞台化したアイヌ劇などを鑑賞できる。

前田正名氏（1850 - 1921）は明治の官僚で阿寒町の初期の開拓者でもある。阿寒湖周辺の森林を購入し保護を図るなど自然保全に貢献している。次男の妻の前田光子は前田一歩園財団を設立し、地元のアイヌ人に無償で土地を提供している。

北海道大学構内を流れるサクシュコトニ川という川の両岸に奈良時代末期から平安時代にかけての（北海道の歴史から見れば擦紋文化期に相当する）竪穴住居跡が多数残っている。現在はその殆どが完全に埋まり、地表から見えなくなっているが、この遺跡保存庭園には三十箇所ほどの竪穴住居の窪みが残っている。ここで、毎年10月にアイヌ民族の先祖供養の儀式が行われる。

会　告

■『比較民俗研究』30号の原稿募集

1990年創刊の『比較民俗研究』も次々号で30号を迎えることになりました。これも同人皆様の日頃の調査・研究の賜物と思います。30号では、比較民俗研究の課題を再確認し、さらに現代社会における意義を検討するため特集を組みたいと思います。ふるっての寄稿を期待します。なお29号は通常どおりです。

・特集テーマ　①比較民俗研究の意義と課題（対象と方法論、事例研究も含みます）
②民俗文化財の保護と活用（ユネスコ無形文化遺産、地域社会での取り組みなど）
③比較民俗研究への期待（随想、注文などの短信）

・原稿募集　①締切　2014年12月末日
②枚数　論文（400字詰原稿用紙50枚まで）　調査・研究ノート（同30枚まで）
短信（5枚まで、多くの方の投稿を期待します）
③投稿先　本号裏表紙の連絡先宛